

【レポート】

「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展」を終えて

白木英敏

1.開催にあたって

平成20年4月、宗像市田熊二丁目に残された約3.1ヘクタールに及ぶ土地開発に先がけ、田熊石畑遺跡の発掘調査が始まった。調査開始からほどなく、弥生時代中期前半頃の墓域が見つかり、6基の墳墓から銅剣・銅矛・銅戈の武器形青銅器が計15点出土した。ひとつの墓のまとまりから出土した点数としては日本最多級となり、通説に反して宗像地域の弥生時代に有力者集団の存在が確認されるとともに、北部九州における弥生時代の集落や墓制を考える上でも、きわめて重要な発見であることがわかった。関係者の尽力の結果、全面保存されることになった。

平成22年2月22日「田熊石畑遺跡」は、早くも国史跡に指定され、本市では昭和46年指定の「宗像神社境内」、昭和51年指定の「桜京古墳」に次いで34年ぶりに誕生した3件目の国史跡である。これを記念した企画展を開催し、指定の周知化や現在計画策定を進めている市民参加による史跡整備へとつなげていくことを趣旨とした。



企画展オープン時の会場

2.開催概要

名 称： 国史跡指定記念企画展

「田熊石畑遺跡と古代のムナカタ展 ―海人たちの足跡―」

場 所： 宗像ユリックス2階 市民ギャラリー（約140㎡）

開催期間： 平成22年10月9日（土）～10月31日（日）

開館時間： 午前10時～午後5時（入室は4時30分）

その他： 入場無料。DVDで映像資料放映。期間中の10月19日に展示替え。

3.内容

本企画展は、田熊石畑遺跡の武器形青銅器をはじめ、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡出土品を展示し、内陸部の穀倉地帯を生業の基盤とし、大海原を舞台に活躍したムナカタ海人族の足跡をたどるものである。このほか、平成22年3月11日、国の登録有形民俗文化財となった「玄界灘の漁撈用具及び船大工用具」の一部を展示した。これは明治期から昭和50

年代まで使われていた漁撈用具やその漁に使った木造和船を作るための用具で、ムナカタ海人族の末裔ともいえる人々の生業や信仰を伝える文化資産である。



田熊石畑遺跡から出土した土器の展示



田熊石畑遺跡7号墓出土品

また、福津市教育委員会の協力で今川遺跡出土の日本最古の青銅器（弥生時代前期初頭）や日本でわずか30例ほどしか見つかっていない手光於緑遺跡（てびかおみどりいせき）出土の木製短甲（弥生時代後期）などがある。

なお、本企画展では「宗像」を「ムナカタ」と表記した。これは現在の行政区を越え、福津市を含んだ歴史的なまとまりの範囲であるという意味と、その時代は8世紀以降の文献史料に記された「胸(むな)肩(かた)・宗形(むなかた)・宗像」以前である、というふたつの意味をこめている。

展示構成は、4部構成とし、Ⅰ部「古代のムナカタへ(弥生時代Ⅰ)」はムナカタが武器形青銅器を保有する基盤となった弥生時代の人々の生活と各地の交流、Ⅱ部「ムナカタ海人族の台頭(弥生時代Ⅱ)」はムナカタの武器形青銅器からみた「クニ」への成長をたどり、Ⅲ部「ムナカタ海人族の繁栄(古墳時代)」は田熊石畑遺跡で見つかった掘立柱建物(高床倉庫)群の意味することや、そこに納められたであろう古墳時代ムナカタの特産物を紹介、Ⅳ部「海に生きる人々(明治～昭和)」は玄界灘の登録有形民俗文化財とした。共通のテーマは「海と生きる」ということで「一海人たちの足跡」を副題とした。

4.開催の広報と関連イベント

プリンター出力をカラーコピーしたものではあるが、A4及びそれを拡大したA3サイズの開催案内チラシを作成し、コミュニティ、学校関係に配布、あわせて宗像市広報10月1日号掲載、定例記者発表で内覧会の案内などを行った。内覧会は、平成22年10月8日(金)の午後1時30分より行い、田熊石畑遺跡の前地権者代表2名をはじめ教育委員、文化財保護審議会委員、歴史観光ボランティアの会、マスコミ等約30名を招いた。また、宗像市長より全面保存にご理解いただいた前地権者へ感謝状と記念品の贈呈式が行われた。

オープニングでは、図書課と協働で年4回開催している「むなかた見聞学講座」第4回とあわせ、文化財担当者数名が20名程度のグループをローテーションで解説し、来場者数は期間中最多の311名を数えた。

5.むなかた電子博物館との連携

開催に先駆け、9月28日から電子博物館上でカウントダウン方式(開催まであと何日)による開催告知を行った。また、主な展示品の写真についても順次アップし、下調べや学究意欲向上のためサイト内の関連コーナーともリンクさせた。

さらに、当初からの計画ではなかったが、試行的な取り組みとして企画展をバーチャル上で再現できないかと考えた。施設を使用した企画展はある期間で終了するものだが、ウェブ上で公開することで、関心があるにもかかわらず様々な理由で足を運ぶことのできなかった人々や再度見学したいというリピーターへの対応としても有効と考えた。

もともと、本物の持つ存在感までは再現できないが、展示会場では見ることのできないカット、例えば銅鏡のウラとオモテを並べて公開するなど現実の展示プラスアルファを工夫することで、電子博物館ならではのメリットを生み出すことは十分可能である。可能ならば会期中の公開が効果的とも考えたが現在準備中である。当初より電子博物館での公開を念頭に入れた準備を行い、スムーズな公開を目指す必要があるだろう。

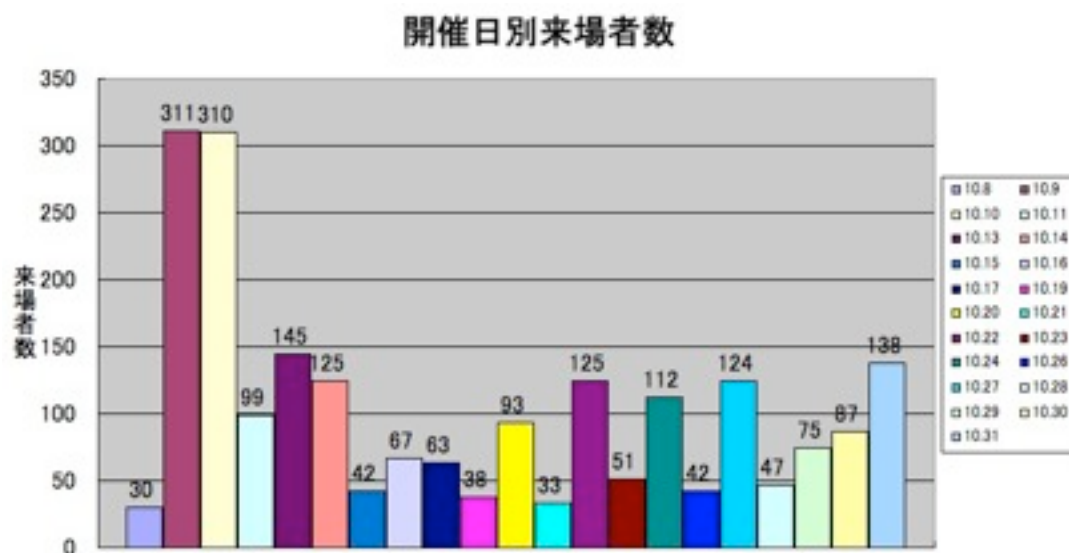
6.来場者数とアンケート調査の結果

ユリックス休館を除いた実質の開催期間は21日間で、来場者数は2,157名、実施したアンケートは445枚で回収率20%である。年齢構成は60代が最も多く次いで70代、50代である。50代以上が約70%で、これはむなかた見聞学などの歴史講座受講者の年齢構成とほぼ同じである。

住まいは市内と市外がほぼ半々で、企画展開催の新聞掲載等により、歴史に関心を持つ市外からの来場者も多かったとみられる。

来場理由は、ユリックス来館時に企画展開催を知った方が多く20%、友人・知人からが12%、事前告知では広報が20%で主体であった。ウェブでの告知については市ホームページが3%、むなかた電子博物館は1%未満の2人であった。

満足度は「満足」・「やや満足」が約80%、「普通」が約15%である。「やや不満」・「不満」では、その理由に「会場の狭さ」が挙げられている。



7.評価

市内の弥生時代・古墳時代の資料を一堂に公開し、宗像市の歴史の豊かさを実際の資料で間近に見られたことが好評であった。さらに、民俗資料館で使用していたパソコンを利用したクイズや、展示替えにともなって設置した「触れる土器（弥生土器・須恵器）」も子どもの関心を引くことができた。一方で、展示面積が狭いため、テーマを決めてより内容を深めた展示を求める意見も多数見られた。企画展中にリピート機能で流し続けられるよう、複数の内容を1枚に取りまとめたDVDを作成し、イス席を設けて放映した。放映内容は鐘崎の漁撈に関する「海に生きる（約19分）」「桜京古墳の3次元測量成果」で、「海に生きる」のドキュメンタリー映像は大変好評であった。また、会場は狭く、ユリックス2階であるなど立地条件は良いとはいえない中、1日平均100名を超える入場者数を達成している。

8.課題

企画展のコンセプトと内容構成の決定が最も重要で時間を要するところであり、本企画展でも田熊石畑遺跡と玄界灘の漁撈具をどのように紹介するかが問題であった。しかし、準備期間を十分取れなかったため資料や遺物の紹介で留まってしまい、類例の調査や資料の検討などの展示内容を深める作業まで至らなかった。そのため、見学者が要望していた具体的な年代や宗像市内の遺跡との関連性などの表記が不十分となってしまった。また、小学生向けの配布資料の作成や、実際に触れられる資料の確保などより分かりやすい展示を目指す予定であったが、不十分であった。

その他、映像資料等については、市が所有する「久原遺跡の整備」などの候補もあったが、VHSからDVDへの取り込みが間に合わなかった。今後は映像や音声の劣化が懸念されるため、多量にあるVHSや8mmテープ、カセットテープ等のデジタル化を計画的に進める必要がある。

9.まとめ

企画展示とは一編の論文を生み出すことにも通じ、テーマや内容の深化にはそれ相応の時間と労力を要するといえる。本企画展は、内容的には準備不足であったにもかかわらず、予想を超える来場者数と高い満足度を頂いた。これには、世界遺産登録活動など本市を取り巻く歴史熱の高まりや宗像の歴史自体が有するブランド力が背景にあると思われ、今後、来場者の期待を裏切らない努力をより一層求められよう。また今回、電子博物館で企画展を知ったというアンケート回答が思いのほか少なく、電子博物館の持つ情報発信能力が活かされていないことも課題である。今後、潜在的な能力をいかに開花させることができるか、これは郷土文化学習交流施設とむなかた電子博物館の両輪駆動、言わばリアル・バーチャルの連携によって成し遂げるべきであろう。

今回の企画展示で見てきた様々な課題は、平成24年度オープンを目指して準備中の博物館機能を持った郷土文化学習交流施設（仮称）の取り組みに活かしていきたい。